

湯前町歴史的風致維持向上計画によせて



湯前町への大きな期待

熊本大学大学院先端科学研究部環境科学部門
建築史・都市計画分野 教授 伊東 龍一

二度にわたって大きな地震が熊本を揺るがし、建物は倒れ、文化財は壊れた。

復興基金で未指定を含む文化財建造物を救ってほしいと訴える提言が、文化庁の文化財ドクター事業の中間報告会で提出されたが、これには、宇土櫓などの重要文化財のある特別史跡・熊本城を核に、熊本市の新町・古町地区を歴史まちづくり法の重点区域にし、重要文化財・江藤家住宅を核に大津町の周辺地区を歴史まちづくり法の重点区域にしよう、宇城市小川地区、同松合地区を重要伝統的建造物群保存地区（重伝建）に選定してもらうことで、これらを護ってゆこうという内容も盛り込まれていた。

熊本県には、重伝建がいまだに一つもない。ないのだから作ろうというのは良いことである。しかし、価値ある文化財があるのであれば、もっと早く動いてしかるべきであった。

湯前町は動いた、地震とは関係ない。熊本の文化財関係者も驚いたのではないか。あの小さい町が、有形の文化財、歴史的建造物にとどまらず、無形の文化財である市房山里宮神社のお祭りや球磨焼酎なども含めて総合的に文化財を把握して、これを活かした町づくりを進めているのである。

人吉・球磨地方は文化財の宝庫といわれる。建造物に限っても国宝の青井阿蘇神社をはじめ、数々の重要文化財の神社本殿・仏堂があり、いまだに建立年代が中世に遡る建造物が見いだされる。人吉市をはじめとする市町村のなかで、歴史まちづくり法に基づいて計画を進めてゆく湯前町は、文化財の保存・活用やそれを利用したまちづくりで、他をリードする立場になってゆくであろう。

湯前町に始まった動きがこの地方全体に波及するであろう。さらには、新町・古町や大津町などの地区にもその波が到達し強く後押ししてくれることを期待している。しかし振り返ってみれば、湯前町とてまだ「湯前町歴史的風致維持向上計画」がまとまったに過ぎない。速度はそれほどではなくてもよい、確実な前進を継続していただきたい。



湯前町歴史的風致維持向上計画に寄せて

熊本大学大学院

資源科学研究科准教授 桂 英昭

熊本県は、平成の大合併において45市町村に再編された。合併を回避した人吉盆地内の相良村、湯前町、山江村、水上村の人口規模は優に5,000人を切り、減少傾向に大きく歯止めがかかる気配は薄い。超高齢化社会、少子化、産業構造の変化、そして大都市への人口集中の波は全土に押し寄せ、都市部より辺地に加速度的な影響を与え続けている。

いつまでも右肩上がりの成長を夢想するようなことは、現実的ではないと誰もが周知しているが、ありきたりな衰微という言葉に漫然と身をゆだねるわけにはいかない。

ここで一旦じっくりと立ちどまり、次世代に受け継がれるべき新たな地域独自の羅針盤を求め、それに従って確実な営みを積みかさねていく覚悟が必要となる。

湯前町が歴史まちづくり法に基づき、歴史的風致維持向上計画や関連構想等を策定することは、実に時宜を得たものである。2015年に文化庁によって人吉球磨地域が地域に点在している有形・無形の文化財をストーリーとして魅力的に発信することで活性化を図ることを目的とする「日本遺産」に認定されていることも力強い背景である。

文化庁によって1975年に発足した伝統的建造物群保存地区の制度は、城下町、宿場町、門前町などに集約的に残る歴史的な集落・町並みの保存を図ることを目的としているため、視覚的評価がわかりやすく観光的な経済効果もはっきりとあらわれ易い。

熊本県内では、山鹿市歴史的風致維持向上計画（2009年認定）の山鹿湯まち地区が伝統的な町屋や八千代座などの建造物が比較的集積して残る観光地化した地区であり、住民にとって限定された地区の価値を認識しやすいことや、その他の地区との住み分けもしやすいという特徴がある。

他方、歴史的建造物が密集した都市部とは異なり、湯前町において歴史的風致の維持向上を考える場合には、これらと一線を画した農村文化圏独特の考え方が羅針盤としての計画の根底になければ継続性は期待できないのではないかという不安が残る。

ここで、計画策定過程で網羅されている有形無形の歴史的な要素や活動について改めて言及する必要はないと考えるが、熊本県下のまちなみ調査・伝統的祭礼調査にかかわってきた経験、湯前まんが美術館・公民館を設計した経験、地域計画の経験から、「やわらか」、「きっぱり」、「かるやか」の町民と共有可能な表現をあげて私見を付け加えさせていただくことにする。

その前に「風致」という言葉に言及しておきたい。この言葉は、風景などの趣という含蓄のある表現であるが、一般的には専門的で行政用語の感が否めず一般町民にはなじみにくい恐れがあり、町民全体で主旨を共有するためには、風景の持つ「趣(おもむき)」や「風情(ふぜい)」という表現の方が浸透しやすいものと考えている。「湯前ふぜい」である。

(1)「やわらか」について

冒頭に述べた現状で、農村景観に属する風情の継承及び発展を考える場合、景観を支える活動母体の弱体化が一番の懸念である。景観を織りなす土台は田畑、森林、祭礼行事やコミュニティ等々であるが、これらは集落、町内会、隣保班などの組織単位できっちりと厳格に運営されてきた歴史がある。

しかし、このような体制は既に心もとない状況に陥ってきており、まずは町全域の各コミュニティがリアルタイムに情報を交換し、柔軟な連帯活動を目指さなければならないと考えている。その手段としてはSNSなども考えてよいであろう。都市部の祭礼では、組織の補完として近年はそのエリアにある老人福祉関係の団体や学校が補うケースが多いが、湯前町の場合は、周辺市町村の組織や県外・町外のやわらかな交流人脈に積極的に情報発信し協力を求めることも一案である。

歴史的風致維持向上計画策定においては、重点区域をハードラインで選定する。都市部の伝統的まちなみが集約的に残るような区域においては、このハードラインは経済行為と結びつきやすいこともあって有効にはたらくが、湯前町のような田園を背にする場合、かなりやわらかな範囲の捉え方をして意識の共有を図っておくことが肝要である。

個人的には、歴史的風致の維持向上を図る上で、市房山神宮里宮神社、明導寺阿弥陀堂(城泉寺)潮神社を結ぶトライアングルの内部だけでなく、さらにその頂点あたりから360度視野に入るエリアをやわらかく念頭に置いておいていただきたいと願っている。

祭礼時にあらわれる花もらいや直会などのひろがりや、メインの神幸行列に注目がいく中で埋没してしまうが、やわらかな日本の風情の背景をなすもののひとつであることなども忘れてはならない。

(2)「きっぱり」について

「きっぱり」とは、はっきりと決意を示すさまのことである。

湯前町に限ったことではないが「空家問題」と「耕作放棄地問題」が内在している。当然であるが超高齢化社会と産業構造の変化などに起因する。

ブロークン・ウィンドウ理論というのがある。「建物の窓が壊れているのを放置すると、誰も注意を払っていないという象徴になり、やがて他の窓もまもなく全て壊される」というものである。空家や空店舗、そして耕作放棄地をそのままにしておくと周囲もそのような状況が広がり続けるのである。

家屋と田畑は個人所有であるために、他人が関与することは当然控えなければならないと考えられてきたが、それも限度に近づいている。行政だけでなく地域で自由に話し合い、きっぱりとした方向性を共有していく必要があると考えている。

例えば、耕作放棄地や荒れた山間部は、人吉球磨文化の宝である茅葺き屋根の社寺建築を保全維持していくための茅場として整備していくことも妙案である。空家は茅置場として有効活用できるかもしれない。

町中心部の染田商店街や中里商店街の変容についてもみんなで語り合う時期がきている。

日本中いたるところで試みられている書割建築のように、表面の体裁だけをつくろうことはなじまないであろう。くま川鉄道湯前駅と交流センター湯～とぴあ、湯前まんが美術館と周辺商店街を核に各商店街とのつながりを明確に打ち出す時がきている。

依然として右肩上がりの路線にわずかな望みを託し、ずるずると先延ばしを決め込むのではなく、歴史的風致維持向上計画の策定を機にきっぱりとした手だてを講じなくてはならない。きっぱりは地域共有の判断のことである。

(3)「かるやか」について

「湯前風情」を町民が一体となって守っていくために、行政依存の自由度が少ない活動ばかりでは包括的継続性に疑問がのこる。町民が地域の課題に対して主体的に関わっていくこと、つまりパブリックな活動の分任こそが重要である。地域の特性を活かした地域づくりには、絶対的な王道はない。

これからは、試行錯誤をかるやかに繰返しながら進んでいくことの方が、風情が醸し出されることが期待できる。特にソフト面の活動や、焼酎・食文化などの取組は、伝統を重

んじながらも老若男女を織り交ぜた軽快で遊び心のある協力関係を築いていくことを心がけなければならないのである。女性や若者をフューチャーした多彩な横社会の結びつきなどに注目したい。

町がパブリックコメントを求め、町外の参加者を募って各種のワークショップを開催することなども有効である。固執しないで常に客観性をもって自己評価を忘れない精神がかるやかさの原点である。

都市部と巨大な資本がひとり勝ちする世界において、辺地がアイデンティティを保ちながら次世代に受け継ぐべき楽しく快適な環境を再構築するための羅針盤として、湯前町歴史的風致維持向上計画の策定とそれにかかわる事業構想がある。

過疎地における問題は、全国津々浦々にみられるが、「日本遺産」にも認定されている歴史的建造物や様々な伝統文化に恵まれたアドバンテージをもつ湯前町は、その指標である風情を創造的に継承していく目標に向かって、「やわらか」、「きっぱり」、「かるやか」の精神を共有し、これからの不確定な社会に先頭にたってチャレンジする姿をみせていただくことを大いに期待する。